それでは次ですが、特別講演を寺崎昌男先生にお願いしたいと思います。寺崎先生は東京大学、桜美林大学、立教大学で長く教鞭をとられて、現在、立教学院の経営に携わっておられます。余計なことをお話しするなと言われているのですが、一つだけお話しさせていただきますと、寺崎先生はもともと福岡県の久留米市の呉服問屋のご長男で、呉服屋さんの経営が先生の大学時代に苦しくなった。そのまま大学に在籍するか、それとも大学を辞めてしまうかという瀬戸際に立たされたときに、大学とはそもそも何なのかということを考えさせられたそうです。

そこで先生の博士論文は、大学の自治制度の研究、大学とは何かということを問うものとなりました。そして大学の日本教育史研究、私を含めて日本教育史の世界にいざなった方というのは数多くいらっしゃると思います。それではよろしくお願いします。(拍手)

寺崎昌男先生　講演

寺崎　こんにちは。悪い予感がしました。齋藤先生のあとの話は絶対に沈むと思っていました。やはりそうでした。いまのような元気のいいお話のあとに、私のような後期高齢者が話をするのは、いま私は非常にためらっていますけれども、こっちのほうが息抜きだと思って、しばらくお聞きください。

今日は大変おめでとうございました。おめでとうございますというのは二つありまして、一つは、こういう会が生まれたことはまことにおめでたいことですねということです。いま齋藤先生からも、その前の別府先生からも納谷先生からも、皆さんからお話があったように、絆とそれからお互いに共に磨くといいますか、そういう会が絶対に必要で、それを一番つくりやすいのは同窓の会で、しかも現在、現職にいらっしゃる方々のつながりです。そういう点では今日のような会ができたことを、同じく私立大学にいる者としては、非常におめでたいことだと思います。

2番目は皆さんの母校である明治大学そのものの最近のご成功です。これは成功しておられますね。私は出身は国立ですが、そのあと私立に移りまして、私学を内側から見て、私学の問題がいまどんなにきついかというのを、嫌というほどわからせられました。明治大学が成功していらっしゃるというのは、あちこちで伺います。

自分で言うのもおかしいですが、立教も成功しています。たとえばオープンキャンパスで来られます。あのオープンキャンパスをやりますと、今年の立教大学のオープンキャンパスに参加した高校生の数は3万6700人でした。これは相当な数です。明治はきっともっと多かったのではないでしょうか。これはいまの時代では奇跡的な数字です。少子化があと10年続きます。これは決して増えることがない。10年続く少子化を前にして、何人くらいの高校生、あるいは高校、中学の先生方が自分の大学に関心を持ってくれるか、大事なことです。

たとえば関西のほうのある大学では、教え子がそこの先生をしていますが、この前、電話をかけてきて、「先生、うちではこの間、オープンキャンパス第1日をやりました。来たのが 17 人でした」と言う。そういう大学も一方であるんです。つまりマスコミがよく言っているように大学の世界にも極端な両極化があって、明治大学や立教大学はその中のぐっと上にあるということです。

この前、リクルートが全国の大学のイメージ調査をやったのですが、それを見ていましたところ、立教大学も女子学生に対する人気は非常に高い。これは全国で一番高いくらいですが、しかし明治大学は立教よりもはるかに高い項目がたくさんあって、しかもそれが関東圏、関西圏、九州圏、中国圏というふうに全国において高いのです。ですから六大学ということだけではなくて、全体としては一番大事な知られ方が広がっているというふうに思います。そういう点では大学のためにもおめでたいと、いま言うべきでしょう。

しかしいずれ、その勝負は10年あとくらいにきっと来ます。どこの大学も、10年間、同じ人気が続くとは限りません。そういう中でいま大学で教えていますが、今日、用意した課題の副題のところに「大学教育を含めて考える」と付けました。これはどうしてかというと、われわれが大学で学生諸君と出会って直面している問題は、実は中高校、小学校の先生方が直面している問題と共通しているのではないかと、僕は絶えず思っているからです。共通した部分がたくさんある。そこのところを正直にお話しするほうが、皆さんが大学は別ものだと思われないで済むのではないかと思いました。

実際に教えていますと、私はいま直接、毎週、授業をしているわけではありませんが、ときどきあったり、昔のことを思い出したり、あるいは現職の方の話を聞いたりすると、小中高の教育問題と大学の教育問題は共通している部分が多々あります。そのことを手がかりにして、お話をしたいと思います。

まず第一は、いま申しましたように生き残りへの苦闘に直面していない大学はありません。旧帝大とか、あるいは非常に大きな私学、明治や立教のような現在、ブランドイメージをちゃんと持っている大学はあまり苦労に直面しないでいいのですが、それ以外のところで脅威に直面していないところはありません。この点は昔と非常に違います。

多くの大学で学生諸君に講義を頼まれたりして、「皆さんは、あなたの出た母校が、昔、こういう大学があってね、と自分で言いたくないでしょう」。こういうふうに言うと、みんな大学問題も自分の問題だなと思って聞いてくれる。そういう状態が広がっています。これは今後それでどう対応するかということがあると思います。

2番目は政府筋でいま考えていること、特に文科省およびその周辺の懇談会等で最近台頭してきているのは、学士課程教育をどう考えるかということです。卒業された方は、学士課程教育はぴんと来ないかもしれません。しかしこれは慣用語になっています。昔は学部の教育と言っていたものです。それがいまは学士課程教育という名前で呼ぼうというこ

とになって、とうとう中央教育審議会の答申の表題にまで挙がってきました。

詳しく言いますと、去年9月に第1回の中間報告が出て、学士課程教育の再構築と書いてありました。今年3月に、いま申したものを改定したものが出ました。第2回の中間報告です。それは学士課程教育の構築、いつの間にか「再」という字は消えました。どうしてかというと、「再」と言うほどなかったという判断があるみたいです。それほどのものはなかったのではないか。厳しい判断をしなければいけないと文科省や懇談会は考えたようです。

そこで「再」が消えて、「学士課程教育の構築」です。おそらく今月以内に本答申が出るでしょう。本答申が出ることははっきりしています。それに加えてまた新しい文部大臣は、中長期の過程を見通した大学教育の変動という、ものすごく長い諮問を重ねて出しました。つまり言いたいのは、ここ数年間、大学の学士課程教育という部分、昔、学部教育と僕らが言っていた部分の大変動に迫られるということです。

なぜそういうことになってきているかと申しますと、一面で世界的動向があるからです。たとえばEU、ヨーロッパ諸国ははっきりと、バチェラーという学位、学士という学位を取るための教育を標準化しなければいけないということを進めています。どうしてかというと、EU諸国の間で学生が自由にどこででも勉強できるようにしたいからです。

つまり各国間の大学教育を同じ水準にすることによって、学生たちの流動化を助け、よって高等教育を活性化する。ここにやはり踏み切っているわけです。それを見たアメリカも、やはり同じように評価と水準の確定という作業に進んでいる。これが大きく日本の文科省等々を動かしています。

もう一つは産業界の動向です。産業界は90年代半ばから、「大学から卒業させる人材をもっとはっきりさせろ。いろいろな能力を持つようにしてくれ」とずっと言ってきました。いまその要望は非常に強くなっているわけです。おそらく来年、この不景気が続き、不況が強まれば、また買い手市場になるでしょう。企業のほうの買い手市場になる。買い手市場になったときに、「大学から卒業する若者たちに、こういう資質を持たせてくれ」という注文は来年に向けてますます厳しくなってくるに違いありません。

そのときに学士課程教育全体の再構築が求められているという、いまの状況はきっともっと強い力となって僕らに来ると思います。そういう流れが一つあるわけです。これはぜひ新聞等々をご覧になっていてください。おそらく新聞等々は学士力答申が出たというふうに報道すると思います。

最後は、大学は外側からいろいろ言われて、外が悪いと言っていて済むかというと、そうではなくなっています。先生方もご承知のように、いま各学校がどうやって個性をはっきりさせるか。はっきりさせた個性をどうやって父母や住民の方たちに公示するか。このことに迫られているわけです。

大学もまったく同じです。大学のアイデンティティというものを確立しろと言われています。たびたびわれわれは「お金が欲しいなら、この申請書類を出せ」と言われて、たくさんの申請書類を書くのですが、その申請書類の第１番目の項目は、「あなた方がいま考えているカリキュラム改革や大学改革は、あなたの大学の建学の精神や、その後の流れとどこで一致しているんですか。どこでつながっているのか、はっきり書いてくれ」という注文が必ず来ます。

そうするとうちの大学は誰がつくって、いつできて、そしてそれからいままでに何が受け継がれてきたか、これをはっきり持たなくてはいけません。その認識をはっきり持っていないといけない。それがアイデンティティというものです。それをはっきりさせるという仕事がどの大学でも非常に大きい仕事になってきました。

理念を持っていない大学は大変です。そういう大学はたくさんあるわけで、国立大学はまずそうです。東大といえども、自分の大学の理念というのは何もありません。国家の理念があっただけで、国家の理念がうちの大学の理念です。これで始まったわけで、どの大学もいま国立大学だって法人になったので必死です。地域の特色と自分の大学との関係をどうするか。いま一生懸命考えておられます。われわれ私学はそのことがもっと切実な課題になってきています。

明治大学は最近、100 年史をおつくりになりました。完成されたあとは、ミュージアムの中にアーカイブスを持っていらっしゃいます。大変いいことだったと僕は思います。「おめでとう」などと人ごとのように言える言葉ではなくて、むしろ羨ましいとさえ思います。いまどの大学もアーカイブス、すなわち資料館、資料室を備え始めています。国立大学だって、そのとおりです。いっぱいつくり始めています。

この仕事は、アイデンティティをはっきりさせる拠点ができているということです。明大はその間に別府先生たちのご努力で、明治大学を創立した人々がはっきりわかってきました。どういうつもりで大学ができたかということ、それ以後の特質は何だったかということもはっきりわかってきました。私はいまこれが各大学に求められている。その中で一歩進んでいらっしゃることも、先ほどの言葉で言えば、おめでたいということの一つに入ると思います。

もう一つは、自分の学校のことを学生たちに教える必要があります。明治大学はそれをなさっておられる。別府先生は自学教育と言うべきだとおっしゃっていますが、私は自校教育という言葉を使っています。自分の学校について、学生に教えることです。特に大学は全入に近くなってきました。特別な試験のある大学と、ほとんど試験がない、受けてくれたら誰でも受け入れますという大学の二つに二極化しています。その誰でも入れる大学に進学してきた学生、しかもペーパーテストは受けないから、AO とか面接で入ってくる、あるいは推薦だけで入ってくる学生たちは、本当に自分の大学のことを知らない。

それはそういう大学だけでもなくて、僕の経験では、立教の学生もそうです。ほとんど知りません。固有名詞で自分の入った大学のことを知っている学生は数えるほどしかいません。上智、青山、立教、これはみんな同じだ。ミッションスクールだ。そこまでくらいしか知りません。上智、青山、立教、ジャルパックで来ました。一番先に発表があったから、ここにいます。こういうふうに言う学生がたくさんいます。

そういう学生たちは記号や数値で入ってきているわけで、大学の顔を見て入ってきたわけではありません。その学生たちに「この大学はほかとはどこが違うか。どこが特色か」ということを教えれば、学生たちは非常に安心する。これが自分の学校のことを学生たちに教えることの最大の効用です。これは不肖、私が立教では初めに始めました。

「本当に入りたかったの？」と言うと、男の子の半分くらいは「早稲田に行きたかった」と言います。女の子は、かなりの数は「慶応」と言いますが、「立教でもほとんどよかった」ということを言います。あとはみんな「国立に行きたかったけれども、落ちました」という学生もたくさんいまして、最初の授業をやると、みんな偶然ここにいることが非常によくわかります。それで立教はほかの学校とどういう違いがあって、ほかとはどういう違う態度を取ってきたかということを話します。決して彼らに上か下かということを言う必要はありません。

悲しいことに、いまの若い人たちは、自分の偏差値がどのくらいかということをちゃんと知っています。空気のように知っています。これは僕らの世代にはまったくなかったことです。偏差値というかたちでぱっと知っているものですから、上とか下とか言う必要はない。よくわかっていると思っています。

ところがそのときに彼らにこの大学はどうやってできて、どういう特質があるか。差異でなくていい。特質があるかということをきちんと教えておけば、非常に安心します。彼らの感じるのは満足感ではなくて安堵感です。安堵感を持つのです。この安堵感こそものすごく大事なことで、安堵感は、実は自分の居場所がやっとわかったということを示しています。

居場所がわかるというのは、自分がわかることの第一歩だと思います。居場所を知った学生たちは、「これから 4 年間、ここでしっかり勉強しようと思います」と言ったり、あとで「私は大学院に行きました」と言う子もいたりして、僕は非常に効果があることがわかりました。それから自校教育をやっていますが、来年１月に全国のシンポジウムを開かせてもらいます。もはや全国で 60 か 70 くらいの大学が自分の学校のことを教えていらっしゃると思います。

逆に言うと、そういうことをしなければならないくらい、大学はいま追いつめられているということです。その点は高校の先生方や中学校の先生方にも同じように見ていただきたい。決して安穏な場所ではありません。

その中で大学が果たす作業の一つは何かというと、教師養成の基礎を狙うという仕事です。大学はいろいろなこと、社会的な役割を果たしていますけれども、その中でも教員養成の仕事はもっとも社会的な仕事です。

先ほど齋藤先生は1人の教職課程の学生の後ろに、200人の子供たちを見るとおっしゃいました。まさにそれは言えていると思います。そのとおりです。教師教育をすることを通じて、非常に大げさに言うと、われわれは日本の教育全体の中のある責任を果たすということに迫られています。僕たちがそうやって頑張っていろいろやっても、先生方の環境は聞くところによれば非常に厳しいということは言うまでもありません。

最近読んだニュースの中で僕が一番ショッキングだったのは、朝日新聞が伝えていましたが、全国で新採用された先生方のうち300人が1年後に辞職されたと言います。これは大変な数字です。たしか5年前は100人台、100何人かで急増しています。あれほどの努力をして、しかも何年もの非常勤講師や兼任講師を続けてこられて、そのうえで合格して入られた方たちが1年で300人も辞めるというのは、容易ならない時代だと思います。

新聞にあった理由は、うち100人くらいはわからない。あと100人くらいは、精神的な意味での負担が大きくのしかかったことによるものであるらしいと書いてありました。もう少しよく調べていないといけませんが、これは非常に大きい問題をはらんでいる数字だと思います。

そういう苦しい中で、しかしこれからどういう先生方になっていくかというと、おそらく社会的批判がいまより弱まることはないと思います。どうしてそんなことを、妙に自信たっぷりに言えるかというと、日本はそういう歴史を持っているからです。小学校ができておよそ140年になりますが、この間に何か問題が起きると、教育が悪いとずっと言われ続けてきました。その教育が悪い中で、最後にやはり教員が悪いと言われるようになってきた。そういうことを言う傾向のある社会なのです。いざとなると先生方のところへ文句が行きます。

さんざん悪口を言われていますから、これ以上来ないかもしれないけれども、大学の教員もそのうちわかりません。いま小中学校の先生方のところにそれが来ています。どうして小中学校の子供たちが理数系に関心を持たないか。理科担当の先生方の学力がもともと低いのではないか。その原因は高度経済成長時代に優秀な理系の卒業生が教育界に行かなかったことにあるのではないか。理屈はいろいろつけられますが、そういうかたちで学力問題一つとっても、最後の結論は教員のところへ行くという歴史を、残念ながら100年間持っているんです。

おそらく今後もそういう圧力の中で負けないかたちで仕事をしていく必要が僕らに迫ってくると思います。日本で教員が批判されなかった時代はないというのは、これは明らか

な事実です。

その次に、いま起きているのは、齋藤先生も先ほどおっしゃったように、教員の免許更新制が出発しようとしています。もう一つは、大学院における教職の修士課程の充実が図られようとしています。これはすべて教育が大事だという批判に応えた政策が生み出したものですけれども、これらも将来どうなっていくか、わかりません。

更新制というのは、全国で大変な数の先生方の免許更新の作業を大学が受け持つことになります。もし明治大学のような大学が「私は知らないよ」とおっしゃったら、大変な数量的事態になるでしょう。国立は当然のようにこれを受け入れざるをえないと思っていますが、私学にもこれは必ず来ると思います。立教もどうやらその前の準備作業を進めておられるようですが、これはやむを得ずやることになるでしょう。やったところはどうなるか。悪くすれば形骸化というのは免れない。そこをどうしたらよいかということです。これはこれから始まるのですけれども、大変な問題になってくると思います。

それから2番目は修士課程です。これも教職の実践とうまくつながるといいのですけれども、修士は修士、大学院は大学院というかたちで、いろいろな国立大学に広がっていくと、あまり役に立たないのではないかと思います。これも非常に危ない仕事です。よほど教育実践と教育理論との関係をダイナミックにつなぐということをしておかないときついと思います。そういう点ではいま行われているのは、不安が大きいです。

3番目に、なぜ大学で教職課程のようなものが置かれたか。これは皆さん在学中にたくさんお聞きになったと思いますし、在学生の方は何回もガイダンスや何かで聞かれたと思いますが、復習してみますと、いまのような教職課程の制度は戦後初めてできました。小中高すべてのレベルの教員免許は、大学における教育を基礎に行う。つまり教員養成は大学で行う。これが第一の原則でした。

この原則はいま思うと、僕は成功したと思います。もしこの原則がなくて、どこででも免許状が出るという制度だったら、何が起きただろうか。いまのお父さん、お母さんたちの学歴は半数近くがもう大学卒以上になっています。ここの中でいまと同じようなプレッシャーをもし現職の先生たちが受けられて、そして学歴主義的な見下げ方をされたりしたら、これはたまらないですよね。そう考えただけでも、私はこの改革はよかったと思います。60年前の僕らの先輩は、きちんとそういうことをやってくれたと思います。

2番目は、いまのことと別の原則ですが、免許状は教職課程を置いた大学ならどの大学で勉強した者にも与えられるという制度です。これは教員免許の開放制といいます。教員免許の開放制という制度が、実力のある大学なら教員を出していいということになったわけです。いまの教職課程はそういうことでできています。

大学としての実力はある。その上にきちんと教育のことを教えてくれる先生がいる。大学もそれをサポートする。こういう条件があれば、私学でも公立でも国立でもどこでもい

い。これも貴重な制度でした。これがあるお陰で、いろいろな大学は社会的責任を果たせるようになってきたわけです。社会的責任を十分に果たせる保証は戦後のこの改革にあったということになります。

ですから大学は教職課程という制度を離してはいけないと思います。経営上もいけない。ものすごい打撃ですけれども、それ以上に大学としての使命から見ても、教職課程という課程は置いておいたほうがいいというのが僕の判断です。

もう一つは、その中で普通の大学、あるいは明治大学のような総合大学に教職課程があることで、どういう利点があるかということです。それは私に言わせると、在学中ではなくて、現職に就かれたあとで大きな効用を発揮すると思います。

生涯学習機関としての大学と言いますが、大学にいる間の4年間の話ではなくて、生涯にわたる学習を、学生たちなら男の子だったら60年ある、女の子だったら70年ある。そういう中で絶えず学んでいくための力を大学は付けていくことになるのですが、生涯学習の第一ステップとしての大学という頭で大学を見ると、その大学の間に何を学んだかは、あとの職業生活に関係があるわけです。

アメリカの学者たちがこのごろ言っているのはプロフェッショナリティ、専門性です。専門性はどうやって保たれるかという問題です。免許状をもらいました。教採にパスしました。それから先生と言われるようになりました。ここで言っているのは、それから先の話です。そのあとの専門性はどうやって保たれうるか。アメリカの学者の一部が言っていますのは、そのあとで本当の専門家になるためには、反省的な熟考というべきものを絶えず繰り返さなくてはいけないということです。

今日やったあの対応は、あれでよかったか。今日使ったあの教材はあれで子供たちに届いただろうか。それからさらに授業だけではなくて、生活指導の面でも、今日言ったあのアドバイスは、あの子に本当に役に立つだろうか。これを理論的に反省してみることが専門家の反省的な熟慮です。反省的熟慮がなければ、専門家は専門家になれない。この哲学は、われわれは大いに学んでおくべきだと思います。

そういう専門家になって、ポジションについて反省するときに、力を与えてくれるのは何か。それは非常に広い意味では教養だと思います。広い教養です。ですから大学、学士課程教育が今後どう変わろうと、その中で広い教養を付けるようなカリキュラムを大学は絶対に保証するべきです。心理学でもあるでしょう、文学でもあるでしょう、それからもちろん社会諸科学でもあるでしょう。いろいろな力を駆使して、僕たちは一つの教材を見直していかなくてはいけません。その力をなすのは広い教養です。

そういう点で、いま新しい教育の問題が大学に突きつけている問いはものすごく大きいと思います。私は今月中に出るであろう学士課程答申の中に、一言でもいいから教養教育という言葉が出てくることを願っていますが、これまでの中間報告を見ると、それは出ないでしょう。一括して世界のレベルに達するということが基調になると思います。それは本題ではありませんが、そういうふうに考えています。

もう一つは学生諸君の変化という問題です。中高の先生方は特に生徒たちが変わったということを、しょっちゅうお感じになると思います。先ほどここに上がられた 20 代半ばから 30 代とおぼしき、あの若い先生方だって、おそらく若い生徒たちが入ってきたら、同じような感覚を持たれるのではないかと思います。

ましてや僕らなどはそうでした。私が最後に教員をしていたのはいまから 4 年前ですが、具体的にこういうことを感じていました。たとえば新学期の一番最初、たいていの大学は最初の 2 週間くらい、この授業に出るか出ないか、お見合いの期間をつくるわけです。第 1 日目はたいていどの教室でも満杯になります。私の持っていたような科目でもちゃんと満杯になりました。そして廊下から入ってくると、廊下にまでぎっしり立っているという状態が最初は続きました。

部屋に入ってくると、後ろのほうは階段になって、前の方の場所で座りきれないから、みんなその間にずっと膝を抱えて座っているわけです。見ると、机は 3 人掛けの机で、両端しか座っていない。真ん中が全部空いていると思うけれども、みんなしーんと座って、何にも言わないでしょう。ですから見かねて、「いま座っている人、真ん中一つ空けてくれないか。それから床に座っている人、ちょっと入れてもらいなさい」というふうに何度か言わないと、彼らは座れないんです。

聞いて見ると、どうやら「ちょっとすみません」と言って、後ろを通って真ん中に座ったり、それから端っこに座っている子が「どうぞ」と言って、お尻をこっちに向けて譲ってあげるということができない。「そういうことをするくらいなら、床に座っているほうがいい」と言います。

私は何度か苦労して 3 人掛けのところは 3 人で座らせて、そうすると後ろに立っている子くらいは前に来られますから、よかった、よかった。それから廊下にいる子を中に入れて、1 時間目の授業を始めたわけですが、いまの話は不思議だ。どうして「ちょっとすみません」が出ないのだろう、「どうぞ」という言葉がどうして出ないのだろうと、大学院のゼミで嘆いていました。そうしたら、これにぴんと反応したのが修士課程の 1 年生の子でした。

「僕はそれに賛成です。わかります」と言うんです。「たとえば駅のそばにスクールバスが停まります。バス停から駅まで少しあります。雨が降ってきたとします。そのときに走っていく僕のところに雨がかからないと思ったら、誰かが傘を差し掛けてくれた。そういうことがあったとしたら、僕は嫌です。それくらいなら濡れていくほうがいい」と言うんです。「僕は非常によくわかります」と言うんです。

私はそういうのを聞いていて、自分の専門でも何でもありませんが、どうやら彼らのコミュニケーションのかたちがいまのような事態をもたらしているようです。人はどういう位置にあるかというのを、ぺたっと座っている友達のことを見て思う。自分は席を動かすとか、あるいは大変だろうからと言って、傘を差してくれる。そのことについて、そんな

ことをされたら、私は何らかの答えを言わなければいけない。それこそ「ありがとう」と言わなければいけない。そういう関わりを持つくらいなら、濡れていったほうがましだ。こういうふうに思っているんです。

つまり別の言葉で言うと、人格の表層のところのコミュニケーションは厭わない。しかしそこからもう少し先まで、下まで下りてきたときのコミュニケーションについては、僕らから見ると非常に臆病なんです。なるべく関わりのないところで付き合いたい。

では「あなたはシカトされていいの。無視されていいのか」と言うと、そんなことはない。無視されるのはやはり嫌なんです。孤独になるのも嫌、しかし表層の傷つかない程度の付き合いに留めたいという気持ちというのは、われわれのころにはあまり実はなかったことだと考えられます。ああいうところを突破していくにはどうしたらいいかということに、大学の教師も迫られているわけです。

もう一つは授業です。いま先生方はご承知かもしれませんが、大学の教員に対しては FD をやれということになっています。FD というのはファカルティ・ディベロップメントという英語です。大学教員の能力開発、教員集団の能力開発と訳されています。その FD をやるということは、いま義務化されました。去年から大学院の教員には FD をしなければいけないということが義務化されました。

今年は学部の先生方、学士課程教育の先生方も FD をしなければいけないということが義務化されました。この義務というのは、先生たちが負っている義務ではなくて、学校経営体が負っている義務です。先生たちにそういうチャンスを与えなければいけないということになっていて、いま全国の大学で大騒動です。FD をどうしたらいいか。何から始めたらいいかということが、いま大問題になっています。

そういう授業を改善するということは非常に大きい課題になってきていますが、いま見ていまして、大学の先生が授業をよくしていくということは、先ほどの齋藤先生のような方は別で、たぶんああいうダイナミックな授業をなさっているでしょう。しかしあれができる先生は限られていますから、大部分の方にとってみると、小中高の授業と基本的に変わらない教授形態が一般化しているわけです。

私どもはいろいろなお話を要求されます。 教育学部をやっていますと「授業とは何ですか」、そこから聞かなければわからないという先生方はごまんとおられる。ましてや大学院でロースクールの先生には、いままで検事をやっていました、判事をやっていましたという先生がいっぱいおられます。

その方たちは判決文を読み上げたり、法廷で怒鳴り合ったりしたことはあるかもしれません。しかし授業をしたことはないはずです。その方たちがロースクールの学生に授業をしなければいけない。真面目な顔で、僕らのところに要望があります。「授業とは何かということを、うちに来て、ロースクールの先生たちに教えてほしい」と言われます。そんな

時代です。

僕はそういうときに必ず言っているのですが、その一つは、まず小学校の教育技術に学びましょうということです。これは大学の先生方が、教職課程の先生方を除いて、ほとんどご存じないことです。学生時代に教職課程をとっていらっしゃらない大学の先生が、実は調べたことはありませんが、極めて多いですね。その先生方にいきなり「いい授業をしましょう」なんて言ったって、それはできない。イロハのイからきちんと説明することが必要です。

先ほど伺ったら、明治大学は授業デザイン力形成支援というプロジェクトで教職課程のGP をとっていらっしゃるそうですから、私がいまここで言うのはおこがましい話ですけれども、私が大学の先生方に「授業というものが持っている最低三つの要素はご存じですか」と聞くと、たいていご存じない。導入と展開と総括です。「これはどんな授業にもある手順なんですよ」と言うと、「はあ」と非常に珍しがられます。

さらに実は導入をどういうふうにやるかというのが、その先生の実力が一番よくわかるんです。私は 20 年間ほど小学校の社会科教科書の監修をしていました。ですから社会科の授業、特に小学校の社会科の授業を何百も見せていただいたことがあります。そうしますと、いかに子どもたちを単元の最初に導入するか。あれで腕が違うということは、よくわかりました。

たとえば私が大学の先生方によく紹介するのは、水の学習のことです。「水について子どもたちが最初に勉強するのは何年だと思われますか」と聞くと、わからないけれども、それは小学校 4 年生です。健康で安全な暮らしという単元の展開で、水を使うか、ごみを使うか、どっちかをなさっているというのが小学校の授業です。4 年生の授業で地域学習の一番最初です。

あれの導入はものすごく難しい。「水を勉強しよう」なんて子どもに言ったって、子どもは何のことかわかりません。そんなことをおっしゃる先生はさすがにいません。たいていの先生は「どんなときに水を使っている？」ということから始まって、「おうちでは？」と問うと、流しで流すとか、お風呂に入るとか、水を飲む、お茶を飲む、お洗濯をするとか、わーっと子どもは言います。

「そうだよね。たくさん使っている。あの水はどこから来るんだろう。誰があの水をきれいにしてくれるんだろう」ということから、水というものの授業に入って、「では、うちでペットボトルに何杯、水を使っているか、調べてみよう」と言って、1 時間目が終わるのがだいたい普通です。いま言っていると、調子いいみたいですけれども、なかなか子どもたちはそういうふうに調子よくは運ばない。でもだいたいそうやって導入が始まります。

もう一つ見たのは、非常に残虐な導入なのですが、子どもたちに「もし東京都で水が全然出なかったら、どうなるだろう」と言ってみるわけです。子どもはびっくりして、お茶碗が洗えない、お風呂に入れない、顔を洗えない、いろいろ言います。「そうだよね。もっとないかしら。もっとないかしら」とずっと聞いていくと、十いくつくらいで、子どもはさすがに詰まるわけです。「ほかにないのか。ゆっくり考えてみよう」なんて言って、その時間が終わる。「もういっぺん考えていらっしゃい」。これは本当に私は実際に見ました。子どもたちこそいい迷惑です。いろいろ考えて言って、そしてやはり導入は「ではこの次からその水のことを話しましょう」というところで終わります。

あの導入はものすごく難しいのですが、当時、非常に感心した導入があります。これは記録にもなっていましたけれども、それは何か。お書きになった先生は、「私はこの導入がわかったときに、初めて水の学習に子どもを導入できたと思った」と言っておられます。その導入はどういうものかというと、「学校の中に蛇口はいくつあるだろうか。それをみんなで数えてみよう」という導入でした。

それを言うと、子どもたちはグループに分かれて、わーっと散っていくんです。数えてみる。それを持ち帰って、北校舎にはいくつあった、こっちの校舎にはいくつあったというのをやってみると、学校の中には200か300くらい蛇口があるんです。それを集めてみて、いかにたくさんの水がわれわれの生活のまわりにあるか、これを子どもたちは何にも言わなくても、そこでわかるんです。

その次に、「では水はどのくらい使うか。おうちではどう使っているんだろうか」とやってみる。「この導入を発見したときに、自分は初めて水の導入に子どもたちを招き入れることができた」とその先生は書いておられました。私は残念ながら見たことはありませんが、見事だと思います。そのくらい導入というのは大事です。

ところが大学の授業で導入ということを考えたことがあるかというと、当時、私でもありませんでした。そのあと気をつけて見ていたら、やはり大学でも同じようなことをしている方がありました。一橋大学の経営学の教授が書いておられた記録です。

その記録を見ましたら、一橋は国立にあります。一橋の経済学部の1年生の授業を、経済学原論でしたか経営学原論でしたかの授業を同僚と二人で受け持ったとき、初めの2、3時間はイントロダクションをやるけれども、それからは全部、国立の町に学生たちを放すと言うんです。「国立の町のどこでもいいから、これから2、3時間見てきなさい」と言って、学生たちを放す。そして「国立の町のどこに問題があるか。そういうことを発見してきて、それを討論しましょう」と言ってやると学生たちは喜んで行くというんです。

たいていの学生がだいたい環境問題で、溝のつくり方とか、ゴミ捨て場のつくりとか、あるいは緑の様子に目を止めて、いろいろな意見を持って帰ってくる。彼らの発表、討論の中で、地域の将来はどうあったらいいかという議論ができるわけです。

その人が書いていましたのは、ある学生は何か問題を発見して、市役所に行って、いきなり「ここは変えたほうがいいんじゃないですか」と言ったらしい。そうしたら窓口でぼろくそに怒られて、「そんなことをいまごろ言ってくる奴があるか」と怒鳴られた。その学生はカンカンになって大学に帰ってきて、「日本にもあんなに頭の固い役所があるんですか。私は日本における役所の頭の固さについて、これから調べます」と言って調べたんです。

この先生のやっていることも同じです。その先生が言っているのは何か。「新入生たちは勉強をしてきただろう。しかし勉強をしていく過程で、彼らが知っているのは言葉や概念だ。それに対応する実態や問題に触れたことがない。全部、一橋に合格するために勉強してきた。ところがそうではなくて、あの言葉に対応する具体的実体は何かを彼らに感じてもらうことがなければ、社会科学の学習の第一歩は始まらない」というのが、その教授の意見でした。

私はまったくこれは言い当てていると思います。中学高校までの間に、言葉と対応する実体というものに、どのくらい体で触れているかということです。それが本当に自分のこととしてわかっているか。これがないと、突破できないと思います。

いま多くの教育学者の中で授業研究は大変進んでいまして、僕などがついていけないくらい進んでいます。その中で私の理解しているところでは、教科の教育は教科の内容をきちんと理解させる。知識、理解とよく言いますけれども、知識を理解させるところにあると、従来思われていました。

しかし「それではだめではないか」と認知科学の方たちが言われて、ある一部の方は「納得させることが大事ではないか。授業を通じての納得とは何か」ということをおっしゃる方もあります。僕はその先に体得というものがあると思います。そうおっしゃっている極めて少数の方がおられますが、これは僕はとてもいい言葉だと思います。体得という言葉は、中国の仏教思想の中から生まれたと聞いています。つまり同じ知り方でも、身体で知るということです。

納得するというところまででは、まだ弱い。たとえば蛇口を調べた子供たち、それから国立の町に走っていった学生たちがやったのは体得です。その前提にあるのが活動というもの、アクティビティと言われるものです。この二つがやはりいまの学校にはどうしても必要不可欠だと思います。そこに戻らないと、本当の教育が大学、それから学校ともにできてこないのではないかと感じているところです。

時間が来ましたので少し急ぎますけれども、もう一つはいまのようなかたちで問題に対応するのと併せて、国際化というプレッシャーが非常に強く来ると思います。これを一番に受けるのは大学です。これはいままでのとおりでは、どうしてもやっていけない。留学生 30 万人計画なんていう乱暴な計画があります。あれがあるから、結局、外に開かざるをえないでしょう。そのうち留学生を何人とっているかが、大業績の一つに数えられる日が必ず来るでしょう。

一方で日本の高校卒業生の中で、一部ですけれども、「うちは、一番できるのがジョンズ・ホプキンスに行きました」とか、「うちはハーバードへ行っています」という高校がちらほら出てきています。あれはそのうちもっと広がるのではないでしょうか。いまはヒソヒソ話ですけれども、そのうちあちこちの子が「アメリカの大学に行こうか、日本の大学に行こうか」、あるいは「アメリカの大学の日本校に行こうか、日本の有名大学に行こうか」と迷う日が来ると思います。そこまで国際化の脅威は来ていると思います。

それをどうしたらいいかという問題がありますが、いまのところ僕らはもう少し腰を据えておいたほうがいいように思います。いきなりそういう動向に対応しようとすると、授業は全部、英語でやりますというような無理なことをせざるをえない。それでいいのかということになると、僕はイエスと全然言えません。そうではないと思います。

それより落ち着いて何をするかというと、いたずらな外国の真似はやめたほうがいいという気がしています。また大学の話で恐縮ですけれども、先ほどの FD、大学の先生が授業を改善するために組織的にお互いに学ぶ。これが大事で、いま義務だと言われているわけです。その FD という言葉ですが、もちろんファカルティ・ディベロップメントという言葉で、直訳すれば能力の開発です。この言葉で僕たちはいま動かされている。政策がいろいろ全部動かされているわけです。

ところがもう一つ SD というのもあります。SD というのは職員の方の能力開発です。これも大事です。先ほど申した中教審の答申には１ページにわたって、ものすごく詳しく書かれています。私は FD も SD も大事だと思いますが、ただ一歩下がって考えると、FD だ SD だと言っている言葉はアメリカから来たと言われていますが、アメリカではやっているかというと、そんなことはないのだそうです。何人もの人から僕は聞きました。「あっちに行ったって、FD という言葉はほとんど聞きませんでしたよ」と言う大学関係者はたくさんいます。「SD って何ですか」と言う人もいます。

アメリカから来た学者に聞くと、「FD などと言う英語はありません」と言われてしまうこともあります。つまり事ほど左様に広がっていない。何と言っているかというと、エデュケーショナル・ディベロップメント、あるいはプロフェッショナル・ディベロップメントと言っています。これは大学の教員として当然の教育的能力的開発という意味です。FD、SD というふうに事々しく言っているのは日本だけかもしれない。事実においてそう思います。

一方、イギリスはどうか。昔からイギリスの大学で FD という言葉はまったく使われていません。全部 SD です。スタッフ・ディベロップメントです。教員も職員もスタッフだということです。念を入れて言うときには、SDU と言うそうです。スタッフ・ディベロップメント・オブ・ザ・ユニバーシティの略です。これしか言わない。カナダやオーストラリアも全部そうで、FD だ SD だ、やれ義務化だと言っているのは日本だけらしいです。

僕らはシンボルに弱くて、それが一人歩きしてしまうという、われわれが持っている悪い風習につけ込まれている気がします。そういうのを見分けることもものすごく大事です。私はいまその時期ではないかと思います。それで主体的に学ぶべきところは学ぶということです。これをやっていかなければいけないと考えています。

最後は信頼の回復と期待です。先ほど別府先生がお触れになった、九州の指導主事が犯したあの仕事、ああいうのから見て、一番悲しいのは教育と教師に対する信頼が損なわれることだと思います。大きく損なわれた。一方で、行政主体のほうは学校を信頼していないし、教師を信頼していない。親が教師を信頼していないという、不信感がわれわれのまわりを取り巻いていますが、しかしそれでいいかということです。僕はお互いに期待する必要があると思います。それを実は本当にやっているか、忘れているのではないかと思います。

皆さん、教職課程のころに何度もお聞きになったかもしれませんが、ときどき思い出していただきたいのは、ピグマリオン効果のことです。アメリカのある小学校に、そばにある大学の心理学者の一団が尋ねてきた。その一団は「われわれは専門調査をやりたい集団なので、生徒たちにテストをさせてほしい」と頼んできた。学校側は快く受け入れたという話です。

くどいかもしれませんが、繰り返して申しますと、いまの期待の問題を考えるときに、あの話はショッキングな話です。先生たちは喜んで、自分の学年の子どもたちに全部テストを受けさせた。大学から来た集団はそれを回収して、別室で採点して、そしてその結果を担任の先生たちに教えた。「われわれがいま印を付けたこの子は、このテストで非常に高い点を取っています。またもう一度、追跡調査にまいります」ということで大学に帰っていったわけです。

大学から来た人たちが言うには、「このテストはオリジナルなテストで、この子が将来どこまで伸びるかということがわかるテストです。いまの到達度とか、過去の学習成果は問わないテストだ」と言って帰っていった。

やがて半年経って、次の学期に来て、もう一度テストらしきものをやって、そのときに前の学期の成績を見てみた。そうしたらものの見事に、彼らが印を付けた、優秀だったという子どもたちの成績は、有意の差をもって伸びていた。このとき大学の教師たちは、現場の先生を二重に騙していたわけです。

第一は何かというと、持ってきたテストはどこにでもある単純な知能検査のテストだった。2 番目は、ちょんちょんと印の付いた子は、まったくテストと関係なく、彼らが恣意的に付けた印だった。ところがその子たちが伸びたというわけです。これはなぜかというのがテスト結果の考察でありました。

そのときに出た結論は、これは先生たちの期待だという言葉だったそうです。先生たちが、「あの子は印が付いている。伸びる子だ」と思った生徒に、つい何気なく掛けた言葉、

何気なく注いだ眼差し、その眼差しに子どもたちが励まされたというわけです。期待ということがどれほど子どもたちの将来の発達可能性に寄与するか。このことを語ったテストです。

ギリシャ神話に出てくるピグマリオンという、池に映る自分の姿を見て、やがて自分もピグマリオンの銅像に化してしまったという例話を引きながら、これはピグマリオンの実験と言われています。そういうことを僕らは苦しいけれども、せざるをえないでしょう。私も学生諸君を見るたびに何だと思いながら、どこで僕はこの子に期待しているかと問い続けていました。

お互いに期待する、信頼するというカルチャーをつくっていくというのが、これからの教育には非常に大事なことではないかと思います。偏差値体制がいけないのは、あれは一人ひとりの位置づけを教えるけれども、その位置づけより下の子を期待させない装置だからだと思います。

多くの者を期待させないようにする装置、一部分の者に期待を集める装置というのは、やはり僕は基本的におかしいと思います。そういう点で大学でも小中高校でもそれぞれ大変でいらっしゃるでしょうけれども、お互いに一生懸命やっていきたいと思います。今日は本当におめでとうございました。(拍手)

司会（佐藤）　どうもありがとうございました。期待という言葉、あるいは夢、そういった将来に対する明るい見通しというものを、クラスの中、教室の中で子どもたちに与えることができたら、教師という仕事はこれほどやりがいのある仕事はほかにはないのではないかと改めて感じさせられました。どうもありがとうございました。

それでは最後に先生方にお配りしました資料の中で、2 点ほどお話しさせていただきたいと思います。一つは、明治大学教育会設立総会参加の皆様へのアンケートというものです。こちらはお名前、ご所属などを書く欄がありますので、ぜひご記入をお願いしたいと思います。

そして最後のお知らせの希望のところに、明治大学教育会メーリングリストへの登録を希望するという 1 番の欄があります。ぜひともこちらにチェックを入れていただければと考えています。そのあとアンケートにお答えいただきまして、こちらの会場を出たところで、窓口にボックスを用意してありますので、そちらに提出していただければと思います。

メーリングリストについてもお話しさせていただきます。もう 1 枚、A4 の横書きのものを見ていただきたいのですが、教育会での公式の行事あるいは集まりというものは年に何回か、度々開くことができるものではないと考えています。しかし先生方の日ごろのご経験、悩み、あるいは実験の結果というものを相互に交流する、むしろ草の根的な力をつ

けていく広場といったものをできるだけつくっていきたいと考えていまして、明治大学教育会のメーリングリストとホームページをつくることを考えています。

たとえばメーリングリストではどういうものを流すかと言いますと、真ん中の四角、点線囲みにありますが、「来年度の明大教育会は何月何日に開かれます。誰々さんがホームページを立ち上げました。大学のホームページからリンクしています」といったご案内を差し上げる予定です。

また先生方にお願いしたいのは、まずはメーリングリストに登録していただきたいということですが、そのほか将来的には、先生方が現在つくって運営されているホームページなどをご紹介いただくとか、あるいは勉強会や読書会を組織したので、参加者を募集しているといったご案内をこちらにいただければ、メーリングリストで流したりできると思います。

あるいは現在、現役の学生さんもいらっしゃいますし、初任の先生方もいらっしゃると思います。そういった方々で勉強会を組織するけれども、誰かコメンテーターが欲しい。ベテランの先生や退職された先生で誰か協力してくださる方はいないかという場合も、もちろんご協力しますので、ぜひご連絡いただければと思います。

このメーリングリストとホームページはこれからということになりますが、メーリングリストについては先生方からいただいた、このアンケート用紙を用いましてすぐにでも立ち上げようと思っています。ホームページについてもできるだけ早く立ち上げて、運営を開始したいと考えています。よろしくお願いします。

高 野（事務局からのお願い）

高野　先ほど副事務局長に選出していただいた高野です。いまご説明のありましたメーリングリストとホームページですが、いままでの説明、それから先ほどの齋藤先生講演のあとの盛り上がりなどから、ずいぶん期待が高まっていると思うのです。しかし実は正直なところ、キーポイントになるべきメーリングリストやホームページについて、誰がどういうふうにして実務を担当していくのかというところの最終的な詰めができていないというのが、恥ずかしいところですけれども、実状です。

アンケートの３番目の項目にも書いてありますけれども、この教育会は今回も含めまして、当初３年間は大学からの財政支援を受けていますが、それ以後については、この３年間の財政支援を受けられる期間を助走期間として、会の組織の基本的な方向性をつくっていく必要があります。

この３年間、かなりボランタリーな力も集めながら、参加者の先生方のお力で、方向性とかたちをつくっていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

司会（佐藤）　それでは最後に一つご連絡を差し上げます。まずアンケートについては、先ほど申しましたとおり出口のところで回収していますので、提出していただければと思います。次に、このあと懇親会の会場は、リバティタワーの 23 階でご用意させていただいています。懇親会に来てくださる先生方は参加票がありますので、こちらにご記入のうえ、お持ちになってください。懇親会の会場で、こちらを提出していただくことになります。現役の学生さんの袋の中にはこれが入っていないそうですが、そのまま懇親会の会場に向かっていただければと思います。

また総会のみ参加される方、懇親会は出席できないという方もいらっしゃるかと思います。その方はネームプレートを出口のところで回収していますので、提出していただければと思います。

外は雨が降っているということです。私も今日は傘を持ってきていないのですが、傘の準備がない方がいらっしゃるのではないかと思います。ぜひともリバティのところまで、相傘でご協力して行っていただければと思います。またお手元の袋の中に地図がありますので、そちらもご確認いただければと思います。

それでは明治大学教育会の設立総会をこのへんでお開きとさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）